

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 山口 裕之

印

学位申請者： 野田茂恵

論 文 名： 思考と芸術のディレッタント——アルベルト・サヴィーニオの形而上芸術

【審査の経過と結論】

野田茂恵氏より 2018 年 3 月 1 日に提出された博士学位請求論文「思考と芸術のディレッタント——アルベルト・サヴィーニオの形而上芸術」に対して、2018 年 3 月 12 日開催の総合国際学研究科教授会にて審査委員会が承認され、学位審査が開始された。

審査委員会は、山口裕之（教授、ドイツ文学・表象文化論）が主査を務め、林和宏（准教授、現主任指導教員、イタリア文学）、和田忠彦（本学名誉教授、旧主任指導教員、イタリア文学）、松浦寿夫（本学名誉教授、フランス文学）、久野量一（准教授、ラテンアメリカ文学）が副査として加わり、この計 5 名の委員により審査を行った。

審査委員は、それぞれ内容を詳細に検討した上で、2018 年 6 月 6 日に本学にて公開審査を行った。最初に野田茂恵氏により提出された論文の概要について説明があり、それに引き続いて、審査委員が一人ずつ講評とともに質疑を行った。

この最終試験に引き続き、論文および最終試験の内容について審査員による協議を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、本学の博士論文審査基準に基づき、野田茂恵氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。

【論文の概要】

この論文は、20 世紀前半に活動したイタリア出身の作家・批評家、そして画家、作曲家でもあったアルベルト・サヴィーニオの思想と作品の特質を描き出すことにより、この作家・芸術家の像を包括的に提示しようとする論考である。

サヴィーニオ（実名アンドレア・デ・キリコ）は、画家のジョルジョ・デ・キリコの 3 歳下の弟であり、兄のデ・キリコの絵画様式として知られる〈形而上絵画〉という発想の根幹を兄と共有している。野田氏は、文学・絵画・音楽といった複数の領域にわたるサヴィーニオの芸術と思想の特質を、とくに二つの概念に焦点を当てることによって浮き上がらせようとしている。一つは、この芸術家が自分自身に認める「ディレッタント」という概念であり、もう一つは、兄のジョルジョ・デ・キリコの〈形而上絵画〉を野田氏自身が拡張させた〈形而上芸術〉という概念である。

論文全体は以下の構成をとっている。

序文

第1章 形而上芸術の理論

第2章 前衛芸術と〈醜〉の勝利

第3章 ディレッタンティズム

第4章 ファシズムの時代

結びに

第1章は、本論文を貫く二つの中心的な軸の一つ、「形而上芸術」の思想と、サヴィーニオの芸術・文学におけるその具体的な現れ方を分析している。「形而上芸術」というタームのもとに野田氏が描き出そうとしているのは、日常の世界のうちにある事物の外観に対して、その外観を超えた事物の真の姿を、ある未知の局面として認識する瞬間のうちにとらえようとする芸術のあり方である。つまりここには、日常的な眼差しの前に姿を現している事物の外観と、その背後にある事物の姿（デ・キリコはそれを「形而上的で亡霊的」と形容する）という世界の二重の局面が現れていることになる。野田氏は、このような世界の重層的局面が、サヴィーニオの音楽における副調性、絵画における複数のパースペクティブ、文学作品における「亡霊的眼差し」のうちに現れていると指摘する。

第2章は、アヴァンギャルド芸術において典型的に認められるとされる「美」から「醜」への美的規範のパラダイム転換に焦点を当てている。野田氏は、ヘーゲル派の美学者カール・ローゼンクランツの『醜の美学』の概念配置に基づきながら、サヴィーニオの芸術・文学に見られる顕著な特質を、この美学上のパラダイム転換に位置づけてゆくことにより、「醜」に関わるサヴィーニオの特質が、世界のもう一つの局面を描き出す「形而上芸術」に繋がるものであると述べる。それとともに、「崇高」ではなく「卑俗」を志向し、悲劇的なものと喜劇的なものを共存させるサヴィーニオのアイロニーや、絵画作品に典型的に見られるグロテスクなユーモアや諷刺性もまた、「形而上芸術」の特質に関わるとする。

第3章では、「形而上芸術」と並ぶ本論のもう一方の主軸である「ディレッタンティズム」に考察が向けられている。「ディレッタント」という言葉は、文学・哲学、絵画、音楽といった複数の領域で仕事をしてきたサヴィーニオが自分自身の活動を言い表すために自ら用いていたものである。しかし、この言葉は単に一つのジャンルにとどまることのない非専門家であるという否定的・限定的な意味を担っているだけではない。サヴィーニオのテクストは、諸芸術に対する関心から博学な知識を駆使して生まれるものであり、その難解さゆえに大衆受けせず読者を選び、とめどなく続く脱線の多い叙述のスタイルをとる。その点で、あらゆるドグマを拒否し、順応主義に懐疑的な姿勢をとるスタンダード主義と同義であると野田氏は主張する。野田氏は、ディレッタンティズムのうちに、規範的思考の拒絶という最も重要な特質を見て取ろうとしている。

「ファシズム」と題された第4章では、1922年に一党独裁の体制を敷いたムッソリーニ政権に対して、同時代の芸術家たちのいくつかの典型的な対応の仕方（反ファシスト的対抗、ファシズム支持、明確な立場表明の保留）を描き出すとともに、その中でサヴィーニオがどのような政治的姿勢をとったか、それが彼の芸術家としての活動のうちどのようなかたちで現れていたかを考察している。サヴィーニオは、多くのイタリアの知識人に見られたように、ファシズムに対して両義的な立場をとったと野田氏はとらえている。彼は、体制にうまく同調しながら作家・芸術家として活動を展開していったという側面を持ちながら、基本的にはムッソリーニに対して冷笑的な眼差しを向けていた。そのことは、「形而上芸術」及び「ディレッタンティズム」というサヴィーニオの根本的な文学・芸術上の方向性と合致するものでもあった。

こういったサヴィーニオの主要な特質から、野田氏は、「前衛と古典回帰、郷土主義と国際主義、自由と抑圧、ファシズムと反ファシズム。サヴィーニオは両大戦期を生きた同時代の知識人の多くが抱えていた矛盾を象徴した表現者であった。」と結論づけている。

【審査の概要——評価と問題点】

最終審査では、サヴィーニオについて書かれた日本で最初のモノグラフィーであるということ、複数の領域にまたがるサヴィーニオの多面的な活動を丹念に追っているという点、そして日本語の翻訳がごく限定的な受容状況のなかでサヴィーニオの全体像を描き出そうとする意欲的な試みに対して、高い評価が与えられた。

それとともに、いくつかの重要な問題点・疑問点も審査委員から示された。審査委員からはさまざまな表現やさまざまな局面への指摘というかたちをとって提示されたそれらの疑問点の最も根本的な事柄は、おそらく一つの問題に集約される。それは、サヴィーニオの像を包括的に描き出そうとするこの野田氏の論文のモノグラフィー的な性格にも起因するものであるが、野田氏がどのような展望のもとに自らのサヴィーニオ論を位置づけようとしているのかが明確に浮かび上がりにくいということである。

野田氏は、審査員からの質問やコメントに対して真摯に答え、サヴィーニオ論の中でこれからさらに焦点を合わせてゆく点についても意識していた。それとともに、さらにさらに綿密な全体像を提示してゆく意欲も見せていた。

野田氏の論文が、サヴィーニオについての包括的研究であるということは、この論文の問題点としても指摘されることになったが、しかしまた、まさに初めての包括的研究であるということが、この論文の意義をきわめて大きなものとしていることも事実であり、審査委員はその点を最終的に高く評価した。

以上、論文審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文は、学術的に非常に重要な貢献となるものであり、野田茂恵氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。